

## 委員会活動報告

### 第193回 aaca フォーラム開催報告

# 日本の布づくりと建築空間との関わり

テキスタイルデザイナー  
株式会社 布 取締役  
須藤玲子



テキスタイルデザイナーとして、布づくりにたずさわって概ね35年になる。今回、国立新美術館において、「こいのぼりなう！」と題した大規模な展覧会を行い、今までにデザインしたテキスタイルの中から319点をこいのぼりとして展示した。それらは、今までデザインしてきた布のアーカイブでもあり、布を立体的に形成すること、空間の中で人と布の果たす役割を実証する試みとなった。

私がデザイン活動を行なっている(株)布は、1984年の設立である。設立当時は、写真のように生成りと藍のミニマルなテキスタイルを扱っていた。村上道太郎の「藍の道」によれば、日本で「藍染め」がはじまったのは「古墳時代」と記されており、「日本の布の色のルーツである藍、そして素材そのものである生成り」を選んでいった。その後、日本国内の藍染め産地を訪ねると、各地の染織産地では、和装文化が培った技術により、新しい布づくりや、さらには特定の産地では、ハイテク技術を駆使し、ユニークな布づくりが行なわれていることを目の当たりにした。そこで私たちは、デザインの舵を大きく切ることとなる。

1980年代は日本のファッションデザイナーがパリコレクションで新旋風を巻き起こしていた時代であり、また、日本の建築家の新しい潮流が生まれた時代でもあった。1987年に私がデザインディレクターとなり、全ての布地のデザインを統括するようになってからは、建築家との協働プロジェクトが次第に増えていくようになった。建築家との出会いは、私たちの布づくりにも変化をもたらし、かなり大胆に、新しいデザインを追求することとなった。特に、今まで布地には使ってこなかった異素材、あるいは布地とは無関係と思われる他分野の技法などを積極的に取り入れ、今までに見た事も無いような新しい布地を次々に発表した。

空間でのテキスタイルの役割は、人間に近いところ、例えば椅子、クッション、レストランであれば、テーブルリネン関係が主だったが、建築家との出会いによって、「被膜」「内と外」「空間の分節」などの考え方に触発され、斬新で新たなテキスタイルの使い方を提案することとなった。1990年頃からは、建築を構成する要素として、テキスタイルを積極的に使う建築家が現れてくる。例えば公共建築でのテキスタイルは、暗幕、舞台の紗幕、緞帳、そして堅牢な椅子ばり、絨緞などが主だった使われ方だったが、空間を柔らかく文節するような新しい機能を持った素材として注目されるようになった。昨今は、特に商業空間をデザインする建築家、インテリアデザイナーとの仕事では、テキ

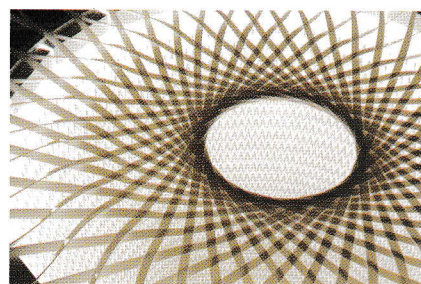
スタイルはオブジェのように、空間を特徴づける素材として扱う例も多くなったように感じる。

2000年に入り、化学繊維の機能が拡大し、ホテルなどの大規模な公共施設での照明、アートワークにもテキスタイルが生かされるようになり、建具などの分野でも、ガラスに布地を挟み込む技術の確立などもあり、空間でのテキスタイルの重要性は増している。

とは言え建築・インテリア空間では、テキスタイルはあくまで素材の一つとして、縁の下の力持ち。コンセプトも含め、空間イメージを共有し、試作を重ねながら空間デザインを作り上げるプロセスに関わっていくことが重要と考えている。

一方で、テキスタイルは常に進化を続けている。例えば化学繊維では、堅牢度が高く、熱可塑性があり、完全ケミカルリサイクル可能な素材ポリエステルは、今後も大いに可能性がある。カーボンファイバー、グラスファイバーなどの繊維の登場もプラスチックの進化とともに、さらに薄く、軽く、自在な表現を可能にしている。また世界各国は蜘蛛の遺伝子を培養し繊維を取り出す技術を開発中である。日本では鶴岡市の「スパイバー」が開発し、世界に先駆け合成蜘蛛糸繊維「QMONOS」の量産に成功した。蜘蛛の糸は強度もあり、薄く、「被膜」で覆われた車両、建築も可能かもしれない。

新しい繊維の開発は、新しい表現へとつながる。未来はテキスタイルと共にあるといっちは言い過ぎだろうか。



大分県立美術館 ユーラシアの庭「水分峠の水草」 Photo by Satoshi Shigeta



国立新美術館 こいのぼりなう！ Photo by Ken Kato